

水見市内遺跡発掘調査概報Ⅱ

谷屋上ノ江遺跡

鞍川 E 遺跡

鞍川 D 遺跡

柳田南遺跡

2012年3月

水見市教育委員会



卷首写真1 谷屋大野バイパス事業予定地遠景（西から） 平成23年9月撮影



卷首写真2 谷屋上ノ江遺跡遠景（南東から） 平成23年9月撮影



卷首写真3 鞍川雲峰線バイパス事業予定地遠景（西から） 平成21年5月撮影



卷首写真4 鞍川雲峰線バイパス事業予定地遠景（北から） 平成21年5月撮影

氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅱ

谷屋上ノ江遺跡

鞍 川 E 遺 跡

鞍 川 D 遺 跡

柳 田 南 遺 跡

2012年3月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。これら、郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

本書で報告するのは、平成23年度に氷見市教育委員会が実施した試掘調査の概要です。いずれの調査も、氷見市内の道路整備事業に先立って実施いたしました。

調査対象となった4つの遺跡のうち、鞍川E遺跡ではその後本発掘調査を実施し、本書の編集と並行して調査成果のとりまとめが行われています。本発掘調査では、弥生時代終末期から古代・中世の遺物・遺構が確認され、氷見市の歴史に新たな情報が加わることになりました。

また、本発掘調査には至らなかったその他3つの遺跡についても、道路整備に先立つ大規模な試掘調査の成果は、今後の遺跡保護や開発行為にとって大きな蓄積となるものです。今回の調査の成果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

今回の試掘調査にあたりましては、富山県高岡土木センターおよび氷見市建設農林部建設課のほか、谷屋地区、鞍川地区、柳田地区の皆様に多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

氷見市教育委員会

教育長 前辻 秋男

例　　言

- 1 本書は、平成 23 年度に富山県氷見市内において実施した谷屋上ノ江遺跡・鞍川 E 遺跡・鞍川 D 遺跡・柳田南遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、市内で計画されている道路整備事業に伴い、富山県高岡土木センターおよび氷見市建設農林部建設課から依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査費用は、国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 4 調査は、第 1 次と第 2 次の 2 回に分けて実施した。調査期間は、第 1 次が平成 23 年 7 月 19 日より 7 月 26 日（実働 6 日）、第 2 次が平成 23 年 11 月 9 日より 11 月 11 日（実働 3 日）である。
- 5 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、課長補佐荒井市郎、副主幹大野究、主任学芸員廣瀬直樹が調査事務を担当し、課長森田栄治が統括した。
- 6 調査および本書の執筆・編集・製図・トレイスは、廣瀬が担当した。また遺物の実測は、廣瀬を中心となり、整理作業員三矢恵京・日南静が行った。
- 7 鞍川 E 遺跡出土遺物の実測図・トレイス図・遺物写真については、同遺跡の本発掘調査業務を委託した株式会社エイ・テックより提供を受けた。
- 8 発掘作業員の派遣は社団法人富山県シルバー人材センター連合会に委託し、氷見市シルバー人材センターから後述する作業員の派遣を受けた。
- 9 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 10 遺跡略号は以下のとおりである。
　　谷屋上ノ江遺跡：TNYKE　鞍川 E 遺跡：KRKE　鞍川 D 遺跡：KRKD　柳田南遺跡：YDM
- 11 調査および本書の作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる（顔不同・敬称略）。

富山県高岡土木センター　富山県教育委員会生涯学習・文化財室　富山県埋蔵文化財センター

氷見市立博物館　氷見市建設農林部建設課　株式会社エイ・テック　東工業株式会社

株式会社サクラテクノ

小堀卓治（氷見市立博物館館長）　岡田一広　吉田有里（以上、株式会社エイ・テック）

目 次

第1章：序説	
第1節：水見市の位置と環境	1
第2節：平成23年度事業の概要	1
第2章：一般国道415号道路改築事業に先立つ谷屋上ノ江遺跡試掘調査	
第1節：遺跡の環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
第2節：調査に至る経緯と経過	3
第3節：試掘調査の成果	5
(1) 調査対象地	5
(2) 出土遺物	6
(3) 調査の状況	5
(4) まとめ	6
第3章：市道鞍川電峰線バイパス整備事業に先立つ鞍川E遺跡・鞍川D遺跡試掘調査	
第1節：遺跡の環境	8
(1) 地理的環境	8
(2) 歴史的環境	8
第2節：調査に至る経緯と経過	8
第3節：鞍川E遺跡試掘調査の成果	10
(1) 調査対象地	10
(2) 出土遺物	14
(2) 調査の状況	10
(4) まとめ	14
第4節：鞍川D遺跡試掘調査の成果	16
(1) 調査対象地	16
(3) 出土遺物	17
(2) 調査の状況	16
(4) まとめ	17
第4章：都市計画道路水見伏木線整備事業に先立つ柳田南遺跡試掘調査	
第1節：遺跡の環境	18
(1) 地理的環境	18
(2) 歴史的環境	18
第2節：調査に至る経緯と経過	18
第3節：試掘調査の成果	20
(1) 調査対象地	20
(3) 出土遺物	20
(2) 調査の状況	20
(4) まとめ	21
引用・参考文献	22
報告書抄録	33

表 目 次

第1表 谷屋上ノ江遺跡（低地） 基本層序	6
第2表 谷屋上ノ江遺跡（微高地） 基本層序	6
第3表 鞍川D遺跡 基本層序	17
第4表 柳田南遺跡 一次調査対象地（上泉海岸線北西側） 基本層序	20
第5表 柳田南遺跡 二次調査対象地（上泉海岸線南東側） 基本層序	20

挿図目次

第1図	調査対象地位置図	2
第2図	谷屋大野バイパス事業予定地周辺の遺跡	4
第3図	谷屋上ノ江遺跡トレンチ位置図	7
第4図	谷屋上ノ江遺跡実測図	7
第5図	市道鞍川壹峰線事業予定地周辺の遺跡	9
第6図	鞍川E遺跡・鞍川D遺跡トレンチ位置図	11
第7図	鞍川E遺跡土層柱状図(1)	12
第8図	鞍川E遺跡土層柱状図(2)・鞍川E遺跡試掘トレンチ平面図	13
第9図	鞍川E遺跡実測図	15
第10図	鞍川D遺跡実測図	17
第11図	都市計画道路水見伏木線事業予定地周辺の遺跡	19
第12図	柳田南遺跡トレンチ位置図	21
第13図	柳田南遺跡遺物実測図	21

写真図版目次

卷首写真1	谷屋大野バイパス事業予定地遠景	8. T4 土層断面
卷首写真2	谷屋上ノ江遺跡遠景	鞍川E遺跡(一次調査・二次調査)
卷首写真3・4	鞍川壹峰線バイパス事業予定地遠景	1. 2. T4 遺構検出状況
図版1	谷屋上ノ江遺跡	3. T5 完掘状況
	1. 2. 調査区遠景	4. T5 土層断面
図版2	谷屋上ノ江遺跡	5. T7 完掘状況
	1. T2 完掘状況	6. T7 土層断面
	2. T2 土層断面	7. 8. 作業風景
	3. T7 完掘状況	鞍川D遺跡
	4. T7 土層断面	1. T3 完掘状況
	5. T8 完掘状況	2. T3 土層断面
	6. T8 土層断面	3. T4 完掘状況
	7. T13 完掘状況	4. T4 土層断面
	8. T13 土層断面	5. T5 完掘状況
図版3	谷屋上ノ江遺跡	6. T5 土層断面
	1. T9 完掘状況	7. 8. 作業風景
	2. T9 土層断面	柳田南遺跡(一~二調査)
	3. 4. T9 遺構検出状況	1. T2 完掘状況
	5. T10 完掘状況	2. T2 土層断面
	6. T10 機乱検出状況	3. T3 完掘状況
	7. 8. 作業風景	4. T3 土層断面
図版4	鞍川E遺跡・鞍川D遺跡	5. T4 完掘状況
	1. 2. 鞍川壹峰線バイパス事業予定地遠景	6. T4 上層断面
図版5	鞍川E遺跡(一次調査)	7. T5 完掘状況
	1. T1 挖状況	8. T5 土層断面
	2. T1 土層断面	図版9 柳田南遺跡(二次調査ほか)・遺物写真(1)
	3. T1 遺構検出状況	1. T3 土層断面
	4. T1 南端	2. T5 土層断面
	5. T2 土層断面	3. 4. 作業風景
	6. T3 土層断面	遺物写真(1)
	7. T4 完掘状況	図版10 遺物写真(2)

第1章 序 説

第1節 氷見市の位置と環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万3千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・瀧浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市の北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。一方、市の南半部は、主として布勢水海（十二町潟）が堆積してきた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる（氷見市1999・2000）。

第2節 平成23年度事業の概要

平成23年度の埋蔵文化財発掘調査事業では、氷見市内の道路整備事業に関わる富山県高岡土木センター所管の事業1件と氷見市建設農林部建設課所管の事業2件、計3件4遺跡の試掘調査を実施した。なお、試掘調査の実施にあたり、国庫と県費の補助を受けた。

今回、試掘調査の対象となった遺跡は、富山県高岡土木センター所管の一般国道415号道路改築事業（通称、谷屋大野バイパス）が谷屋上ノ江遺跡、氷見市建設農林部建設課所管の市道鞍川靈峰線バイパス整備事業が鞍川E遺跡・鞍川D遺跡、同じく建設課所管の都市計画道路氷見伏木線整備事業が柳田南遺跡である（第1図）。

試掘調査は、調査対象のひとつ鞍川E遺跡北側の一区画で農作物の収穫を待たなければならぬという事情もあって、7月と11月の2回に分けて実施した。7月の一次調査では、谷屋上ノ江遺跡、鞍川E遺跡の南側地区、柳田南遺跡の北西側地区的調査を実施した。11月の二次調査では、鞍川E遺跡の北側地区、鞍川D遺跡、柳田南遺跡の南東側地区的試掘調査を実施した。整理作業は、試掘調査終了後に着手し、遺物の洗浄・注記・実測等を実施した。その後、年が明けた平成24年1月から、本文の執筆、図面トレース作業、遺物写真の撮影等を実施した。

また今年度より、同じく国庫と県費の補助を受け、氷見市内遺跡詳細分布調査事業に伴う小窓寺総合調査事業をスタートした。事業は、平成23年度から5か年の計画で、今年度はその初年度として、氷見市小窓に所在する古代の瓦窯跡、小窓瓦窯跡と周辺部の測量調査を実施した。この小窓寺総合調査事業の成果については最終年度となる平成27年度に取りまとめを行う予定である。

2回の試掘調査の期間および発掘調査の体制は以下のとおりである。

一次調査

調査期間：平成23年7月19日より平成23年7月26日（実働6日）

重機：東工業株式会社

空中写真撮影：株式会社エイ・ティック（一般国道415号道路改築事業予定地）

発掘作業員：後山健作・上清・川嶋和夫・榎原二郎・西川明・水上操・向修誠

・森川昌一・山下巽・山本潔

（以上、氷見市シルバー人材センター）

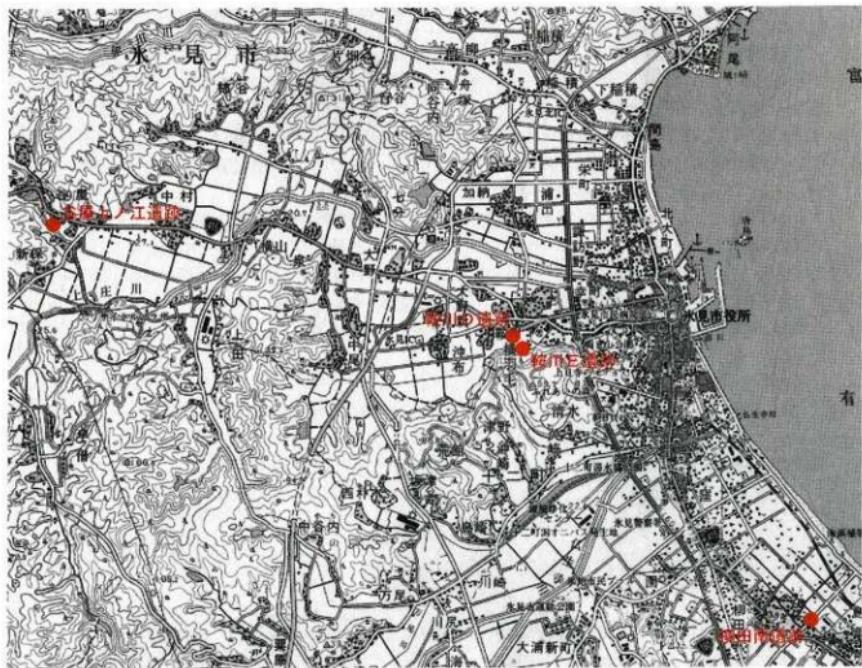
二次調査

調査期間：平成23年11月9日より平成23年11月11日（実働3日）

重機：株式会社サクラテクノ

発掘作業員：小畠政昭・武田俊弘・中嶋重信・西川明・浜畠淳二・森博明

（以上、氷見市シルバー人材センター）



第1図 調査対象地位置図 ($S = 1 / 50,000$)

第2章 一般国道415号道路改築事業に先立つ谷屋上ノ江遺跡試掘調査

第1節 遺跡の環境

(1) 地理的環境（第2図）

調査対象の谷屋地区は、上庄川北岸の平地と上庄川の支流論田川の谷間に位置し、古くから石川県の羽咋市と志雄町へ往来する分岐点である。谷屋から論田・熊無にかけての地域は地滑りが多発する地域で、谷屋地区北側の丘陵で平成14年11月に地滑りが発生したほか、南側の新保地区の丘陵部でも平成21年に地滑りが発生している（水見市1999・2000・水見市立博物館2007）。

谷屋上ノ江遺跡は、谷屋地区的集落と論田川に挟まれた平地、標高約15mに立地する。一般国道415号道路改築事業のための用地買収が行われる以前は水田・畑地として利用されていた。

(2) 歴史的環境

以下、上庄川流域の遺跡について中流域を中心に概観する（水見市2002・水見市教育委員会2001）。

上庄川流域の縄文時代の遺跡は、上流丘陵部と下流域に散在しており、中流域では未確認である。また弥生時代の遺跡についても、中流域では未確認である。安定した平野が開け、弥生時代中期から終末期の遺跡が複数営まれた下流域や、水見市の弥生時代終末期の集落跡、小久米A遺跡が立地する上流域とは対照的である。

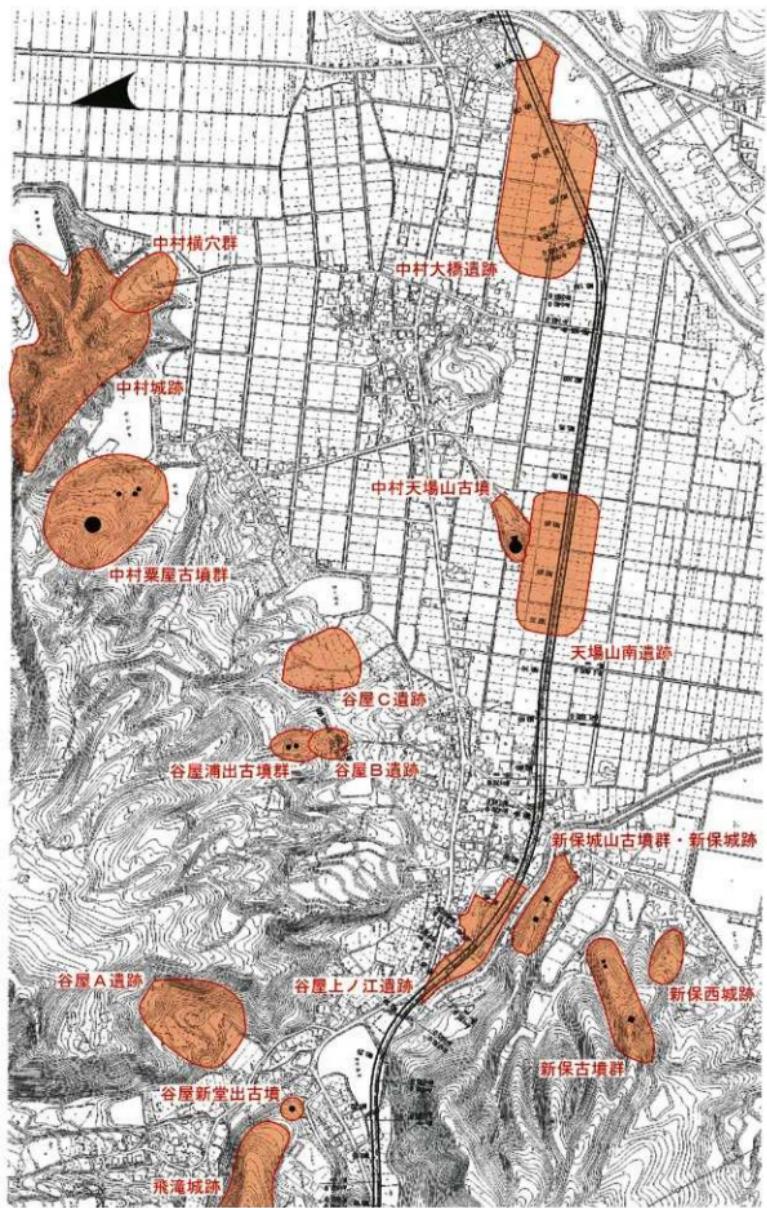
古墳時代に入ると多くの古墳群が築かれるようになる。この地域は水見市内でも最も古墳が集中する地域であり、県下最大級規模の円墳を擁する泉古墳群、発掘調査で短甲が出土した古墳時代中期のイヨダノヤマ古墳群、平野部の独立丘陵に単独で築かれた前方後円墳の中村天場山古墳など、古墳時代前期から後期にかけての古墳が多数確認されている。谷屋地内には、谷屋新堂出古墳や谷屋浦出古墳群があり、谷屋浦出古墳群に隣接する谷屋B遺跡では、古墳時代後期の須恵器や滑石製の子持勾玉が採集されている。谷屋上ノ江遺跡とは論田川を挟んで南側に位置する丘陵上には新保城山古墳群、そのさらに南側には新保古墳群が所在し、いずれも古墳時代初頭の築造と推定されている。また上庄川流域では、古墳時代後期以降、横穴墓群も複数造営されており、中流域には新保横穴群・中村横穴群が所在する。

古代から中世にかけても遺跡が広く分布し、古墳時代に引き続いだ積極的な開発が行われていた地域と推定される。谷屋上ノ江遺跡の南西約1kmには古代寺院の小窟廬寺跡が所在する。これまでに平瓦や須恵器が採集され、8世紀初め頃の寺院と推測されている。小窟廬寺跡の南方丘陵裾にその瓦の一部を供給した小窟瓦窯跡が立地しているほか、廬寺周辺には新保南遺跡や新保野際遺跡といった古代から中世にかけて断続的に営まれた遺跡が所在する。また、谷屋上ノ江遺跡の北側約300mに所在する谷屋A遺跡は、「上坊寺」と呼ばれる寺院伝承地である。近くの飛瀧神社に祀られている聖観音菩薩像と地蔵菩薩像は、上坊寺跡に建立された白山社に祀られていたものが、昭和2年に合祀した際に遷座されたものである、という。どちらも朽損が著しいが、平安時代後期の作とされている（水見市1963・水見市教育委員会2002）。

中世の遺跡としては、山城跡や宗教関連遺跡が複数確認されている。谷屋上ノ江遺跡の論田川を挟んだ南側には、先に触れた新保城山古墳群を改変して築かれた新保城跡があり、谷屋地区西端の丘陵上には飛瀧城跡が立地する。谷屋の西側、論田地区の山間部には論田經塚があり、かつて瓦経が出土したと伝えられる。また、谷屋地区北西の熊無地区には中世墓である熊無遺跡があり、石仏・石塔類や集石が確認されている。

第2節 調査に至る経緯と経過

平成19年に開通した能越自動車道水見IC東側のアクセス道路、一般国道415号（鞍川バイパス）の整備に先立つ埋蔵文化財の保護対策協議は、平成11年度より行われていた。それと並行して、水見IC以西、谷屋～大野両地区間のバイパス（谷屋大野バイパス）整備に先立つ埋蔵文化財の保護についても、水見市教育委員会と水見土木事務所の間で議題にあがることとなった。この時点で複数あった計画ルー



第2図 谷屋大野バイパス事業予定地周辺の遺跡 (S = 1 / 10,000)

トの中には泉古墳群を横切るものがあり、特に古墳群中の前方後方墳（22号墳）には影響を与えないルートを取るよう申し入れた。

具体的な埋蔵文化財保護対策に関しては、谷屋～大野間のルートが地元、水見市、水見土木事務所を交えた協議会で確定した後に協議されることになった。初回の協議は、水見市教育委員会と水見土木事務所の担当者の間で、平成17年12月2日に行った。協議では、確定ルート周辺を対象にあらためて分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地について把握して試掘調査の有無を判断することなど、水見市教育委員会の意見を伝えた。この協議を受け、水見市教育委員会は平成18年3月27日に予定地内を対象とする分布調査を実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である領毛A遺跡の周辺で遺物を採集したほか、3か所で新たに遺物の散布が確認された。3か所の散布地は、谷屋山内の谷屋上ノ江遺跡、谷屋・中村間にまたがる天場山南遺跡、中村地内の中村大橋遺跡として周知し、試掘調査の対象とすることになった。

平成19年6月から8月には、谷屋大野バイパス計画ルートと泉古墳群の位置関係を把握するため、水見土木事務所による泉古墳群の測量調査が実施された。測量調査は、泉古墳群中の前方後方墳（22号墳）を保護し、発掘調査が必要な古墳の位置情報を確認するためのもので、水見市教育委員会との協議により、測量調査の対象は約20,000m²、6号墳・7号墳（貓塚）・8号墳・9号墳（鶏塚）・21号墳・22号墳の6基の古墳を含む範囲とした。測量調査の終了後、水見市教育委員会は水見土木事務所に対し、測量調査の成果に基づいたルートの調整を要請した。その結果、6・7号墳が削平されるルートと8・9号墳が削平されるルート等が検討されることになった。なお、平成23年度の時点では、8・9号墳が削平されるルートで事業計画が進められている。

平成20年から22年度まで、順次、用地取得等が進められ、平成23年度には、先行して用地買収が完了した谷屋上ノ江遺跡の試掘調査を実施することが可能となった。

谷屋上ノ江遺跡の試掘調査は、平成23年7月19日・20日・22日・26日の4日間で実施した。調査対象地の面積は約5,863.13m²、発掘面積は約239.7m²である。試掘トレレンチ計13基を設定し、調査を行った。基本的に重機による掘削としたが、重機の進入できない畠地については人力により試掘トレレンチを掘削した。7月19日より開始した調査は、間に鞍川E遺跡・柳田南遺跡の調査を挟みつつ継続し、同26日に畠地部のトレレンチを埋め戻して終了となった。なお調査終了後の9月に、谷屋上ノ江遺跡および谷屋大野バイパスの事業予定地を対象とする空中写真の撮影を実施した。

第3節 試掘調査の成果

（1）調査対象地（第2・3図）

谷屋上ノ江遺跡は、平成18年、今回の事業に先立ち実施した分布調査で発見された遺跡である。谷屋地区の集落と論田川に挟まれた平地、標高約15mに立地する。遺跡のほぼ中央部には、舌状の微高地が北東から南西側に張り出しており、畠地として利用されている。また、論田川に沿う低地は水田として利用されており、一部は荒蕪地となっている。分布調査では、水田部分で古代の須恵器・土師器が採集された。

なお、一部の区画が用地未買収のため、調査対象から除外となった。また調査区北側はぬかるみがひどい荒蕪地で重機が進入できなかったことと、周囲の調査状況を考慮して調査対象から除外した。

（2）調査の状況（第3図）

調査対象地に試掘トレレンチを13基設定して調査を行った。

調査対象地の大部分を占める水田として利用されていた低地については、谷地形を埋めるシルト質の土が厚く堆積する。遺構・遺物は確認できなかった。地元の方の話では、調査対象となった論田川の周辺は上流域からの流木・土砂等が流れてきて埋まった場所だとのことであったが、シルト質の土層の中には自然木等が多く混じっており、その話を裏付けるものと考えられる。論田川の上流域にあたる熊無・論田両地区は地滑り多発地帯にあたり、そうした地滑りによる土砂の流入等の影響も想定される。

一方、遺物の散布が確認されるのは、調査対象地ほぼ中央の用水に開まれた微高地である。この微高地に人力で試掘トレンチ T9・T10 を設定したところ、T9 の北端近くで小穴等の遺構を確認した。また、T9 から古墳時代須恵器が 1 点出土したほか、土師器破片や古代須恵器等が出土した。T10 は一部擾乱を受けしており、遺構・遺物は確認できなかった。

低地および微高地の基本層序を第 1・2 表に示した。

第1表 谷屋上ノ江遺跡（低地） 基本層序

I層	耕作土	20 ~ 40cm	にぶい黄褐色砂質土
II層		10 ~ 60cm	灰黄褐色砂質土
III層	谷埋土	10 ~ 40cm	にぶい黄褐色シルト
IV層	谷埋土	0 ~ 70cm	黄灰色シルト
V層	地山		黄褐色砂

第2表 谷屋上ノ江遺跡（微高地） 基本層序

I層	耕作土	2 ~ 10cm	にぶい黄褐色砂質土
II層	耕作土	10 ~ 20cm	にぶい黄褐色砂質土 かたくしまる
III層	遺物包含層	0 ~ 6 cm	にぶい黄橙色粘質土
IV層		0 ~ 15cm	灰黄褐色砂質土
V層	地山		にぶい黄橙色粘質土 かたくしまる

(3) 出土遺物（第4図）

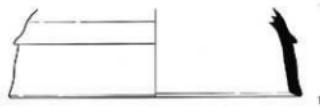
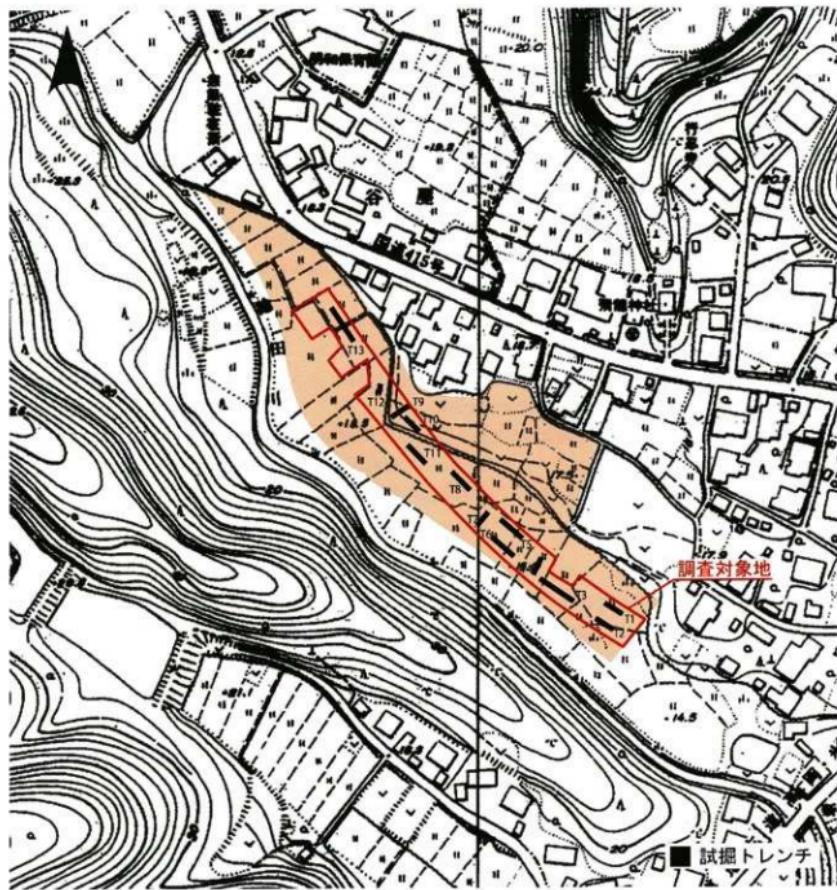
調査では、古墳時代須恵器・古代須恵器・近現代磁器等、14 点が出土した。そのうち 1 点を図示した。1 は古墳時代須恵器の杯蓋である。調査対象地ほぼ中央の微高地に設定した試掘トレンチ T9 より出土した。口径 11.8cm を測る。外面に稜を持ち、口縁端部内面に面を取る。古墳時代後期のものであろう。

(4) まとめ

調査対象地の大部分を占める論田川沿いの低地については、論田川による土砂流入の影響を受けていると考えられ、遺構・遺物ともに確認できなかった。調査対象地のほぼ中央の微高地では小穴等を検出し、古墳時代および古代の遺物が少量出土した。おそらく、畑として利用されているこの微高地から現在の集落、国道がある北東側の丘陵裾部にかけて遺跡が広がっているものと考えられる。道路整備予定地については遺構・遺物ともごく少量であり、一部は擾乱を受けているため、本発掘調査は不要と判断した。

時期が判別できる遺物はごく少量であったが、古墳時代後期と古代のものがある。谷屋上ノ江遺跡と論田川を挟んだ南西側には新保城山古墳群と新保古墳群が所在するが、いずれも古墳時代初頭の築造と推測されており関連性は薄い。一方、北東側には古墳時代後期の須恵器や子持勾玉が採集された谷屋浦出古墳群・谷屋 B 遺跡がある。直線距離で 0.4km ほどの地点に所在しているが、むしろこちらの遺跡群との関連性が深いものと推測される。

さて、一般国道 415 号（谷屋大野バイパス）道路改築事業の計画地内には、残り 4 か所の遺跡が所在する。谷屋・中村両地区間にまたがる天場山南遺跡、中村地区の中村大橋遺跡、泉地区の泉古墳群・領毛 A 遺跡である。今後も用地買収の進捗にしたがって順次試掘調査を実施していくことになるが、氷見市教育委員会として適切な遺跡の保護に努めていきたいと考えている。



0 10cm

第4図 谷屋上ノ江遺跡遺物実測図 (S = 1 / 2)

第3章 市道鞍川霊峰線バイパス整備事業に先立つ鞍川E遺跡・鞍川D遺跡試掘調査

第1節 遺跡の環境

(1) 地理的環境（第5図）

調査対象である鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流域南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南西端の大釜山（501.7m）に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積ともに最大である。

鞍川地区の北側に当たる上庄川下流左岸の加納地区の平野には、弥生時代から古代にかけて加納湯（仮称）という湯瀬が所在したと推定される。加納湯は南北約1km、東西約0.5kmと推定され、さらに北側の余川川下流域に広がる可能性がある（氷見市1999・2000）。

鞍川E遺跡は、上庄川下流右岸の平野南端、標高約7mに立地し、背後には丘陵が迫る。平成21年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。

鞍川D遺跡は、標高約5mで、鞍川E遺跡の北西には隣接して立地する。平成6年度に氷見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。

鞍川地区では昭和30年代に土地改良が実施され、周辺には整然とした水田が広がっている。また、鞍川D遺跡の北側には、氷見北ICのアクセス道路として整備された一般国道415号（通称、鞍川バイパス）が横断し、西側は、平成23年度に開業した金沢医科大学氷見市民病院の敷地となる。

(2) 歴史的環境

以下、上庄川流域の遺跡について下流域を中心に概観する（氷見市2002）。

上庄川流域の縄文時代の遺跡は上流丘陵部と下流域に散在している。下流域の縄文遺跡として縄文後期の鞍川寺田遺跡がある。有磯高校のグランド造成工事で縄文土器が出土したというが、詳細は不明である。

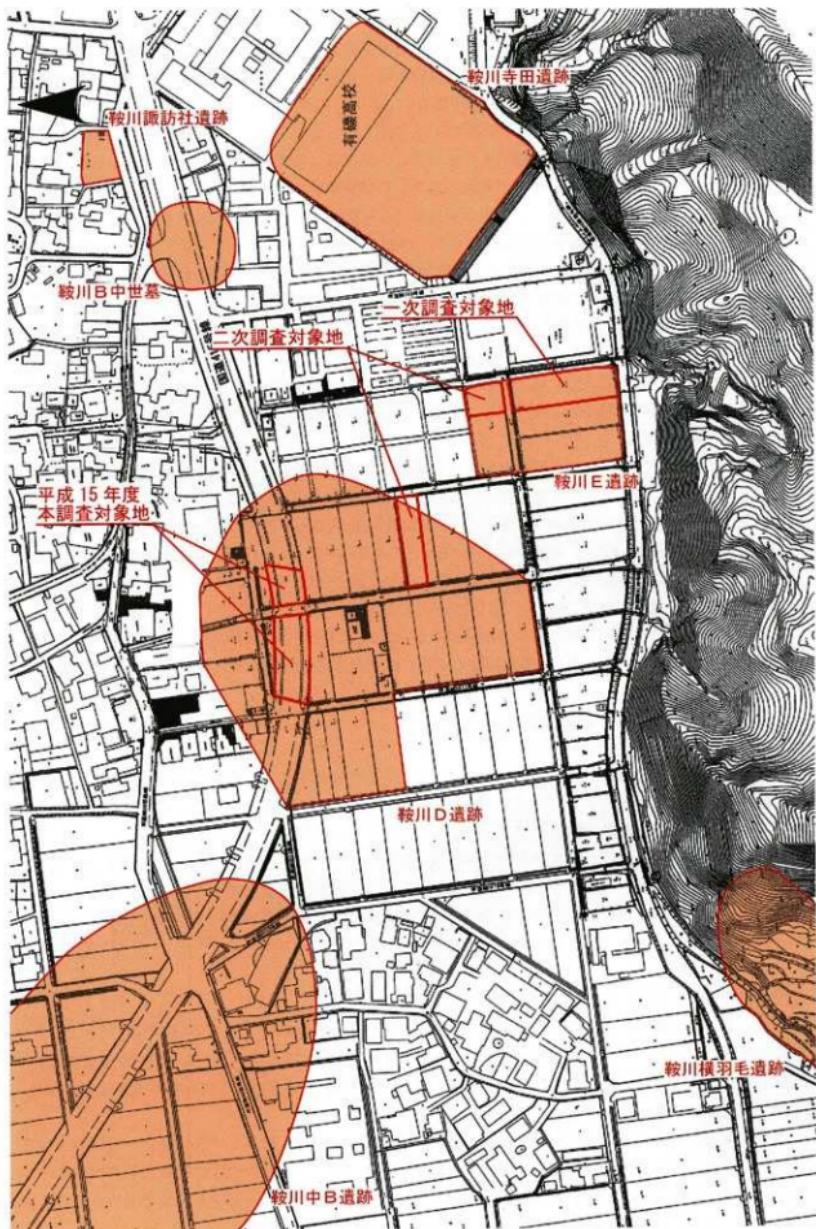
上庄川の下流域は弥生時代に入って積極的な土地利用が行われていったと考えられる。弥生時代中期の遺跡として鞍川中B遺跡がある。鞍川中B遺跡は加納湯に流れ込む流路のほとりの低地に営まれた遺跡と考えられる。弥生時代後期の遺跡として鞍川金谷遺跡が、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として鞍川横羽毛遺跡、糠塚南遺跡、沖布A遺跡がある。いずれも加納湯を囲む丘陵縁辺部から微高地に営まれた遺跡である。また、弥生時代終末期には朝日山丘陵上に朝日大山遺跡が営まれた。

古墳時代には、上庄川流域から加納湯周辺にかけての丘陵上に多くの古墳が築かれた。その数は、上庄川流域で31群183基、加納湯周辺で6群71基となり、氷見市内で最も古墳が集中する地域である。これはこの地域が、氷見市内で最も広く安定した平野が開け農業生産に適していたこと、臼が峰越えのルートをはじめとする能登と結ぶ街道がこの谷を通っていたことなどが要因と推測される。だが鞍川南方の丘陵上を見ると、丘陵の反対側の布勢湖（現在の十二町潟）に面した朝日山周辺には古墳群が立地するものの、加納湯に面する鞍川側では古墳の存在は確認されていない。

古代・中世においても上庄川中下流域には遺跡が広く分布している。中世には上庄川流域から十二町潟周辺を範囲とする阿努荘という庄園があり、上庄川の水運、能登を結ぶ陸運などの要素を背景として古墳時代に引き続いて積極的な開発が行われていたと考えられる。鞍川D遺跡では13世紀代の集落が、鞍川中B遺跡では、中世から近世の溜池状造構が見つかっている。なお、室町・戦国時代には、国人土豪鞍河氏が現在の鞍川周辺を本貫地としていたとされる。

第2節 調査に至る経緯と経過

平成19年に能越自動車道高岡北ICと氷見IC間が開通し、氷見ICのアクセス道路である鞍川バイパスの供用が開始されて以来、鞍川地区周辺の開発が加速している。特に今年度、平成23年9月には金沢医科大学氷見市民病院がオープンしたことにより、今後もよりいっそう開発事業が増えるものと予測さ



第5図 市道鞍川塩峰線事業予定地周辺の遺跡 (S = 1 / 3,000)

れる。

今回の調査原因となった市道鞍川靈峰線バイパス整備事業もそのひとつである。市道鞍川靈峰線バイパスは、国道415号バイパスを起点とし、市道氷見駅朝日線を経由して国道160号に連絡する路線であり、沿線には、本市の文化・観光の拠点施設である、ふれあいスポーツセンター・ふれあいの森がある。ふれあいスポーツセンターは、平成17年からの10年間、春の全国中学生ハンドボール選手権大会の会場として利用されるなど各種事業が展開されており、一年を通じ利用者が多い。このため、国道160号交差点においてかなりの渋滞が発生している。こうした事情を受け、国道160号と市道氷見駅朝日線交差点の渋滞解消に寄与するものとして、また氷見高校と有磯高校の再編統合により開校された新氷見高校のアクセス道路として、市道鞍川靈峰線バイパスの整備が計画された。

平成21年11月30日には、氷見市教育委員会が事業予定地周辺の分布調査を実施し、新たに鞍川E遺跡の存在が確認された。このため、鞍川バイパス整備に先立って本発掘調査が実施された鞍川D遺跡と合わせ、2か所の試掘調査が必要となった。試掘調査は、平成23年度に実施することで計画を進めた。

鞍川E遺跡・鞍川D遺跡いずれも、試掘調査予定地の用地は未買収であったため、地権者の承諾を得て調査を実施することになった。なお、鞍川E遺跡の一部区画では平成23年も耕作が予定されていたため、休耕する区画の試掘調査を先行することとし、7月に一次調査、秋以降の作物収穫後に二次調査を実施する計画とした。

試掘調査では、機械力によって試掘トレーナーを掘削した。試掘調査は、一次調査は鞍川E遺跡の中央～南側を対象とし、谷屋上ノ江遺跡の調査から引き続き平成23年7月21日・22日の2日間、二次調査は鞍川E遺跡の北側と鞍川D遺跡を対象とし、平成23年11月9日・10日の2日間で実施した。

調査対象地の面積は、鞍川E遺跡が計1598.08m²（一次1,153m²、二次445.08m²）、鞍川D遺跡が512.38m²である。試掘トレーナーは、鞍川E遺跡が計7基（一次4基、二次3基）、鞍川D遺跡が5基を設定した。発掘面積は鞍川E遺跡が計217.6m²（一次182.7m²、二次34.9m²）、鞍川D遺跡が53.9m²である。

一次の試掘調査で遺構・遺物の広がりが確認された鞍川E遺跡中央～南側の範囲については、7月の試掘調査終了後ただちに建設課と本発掘調査の実施に向けた協議を開始した。

第3節 鞍川E遺跡試掘調査の成果

（1）調査対象地（第5・6図）

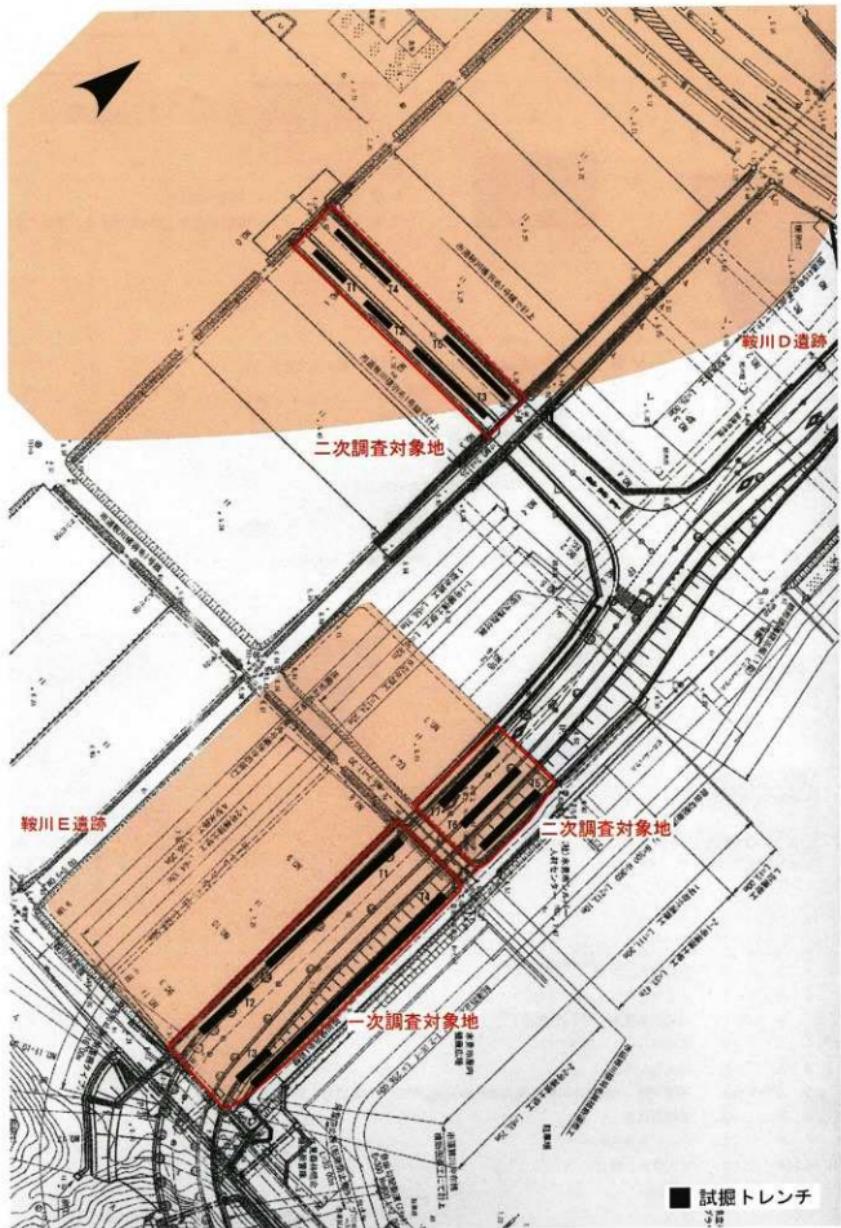
鞍川E遺跡は、平成21年、今回の事業に先立ち実施した分布調査で発見された遺跡である。上庄川下流右岸の平野南端、標高約7mに立地し、背後には丘陵が迫る。分布調査では、広範囲で土器片を探集したが、細片であり時期の特定にはいたらなかった。

今回の試掘調査対象地は、分布調査で遺物の散布が確認された範囲の東側にあたり、現況は水田・畑地である。その東には、氷見市シルバー人材センターと氷見市屋内健康広場、さらにその東には、県立有磯高校が所在する。なお有磯高校のグラウンドには、かつて縄文土器が出土したと伝えられる鞍川寺田遺跡が所在する。

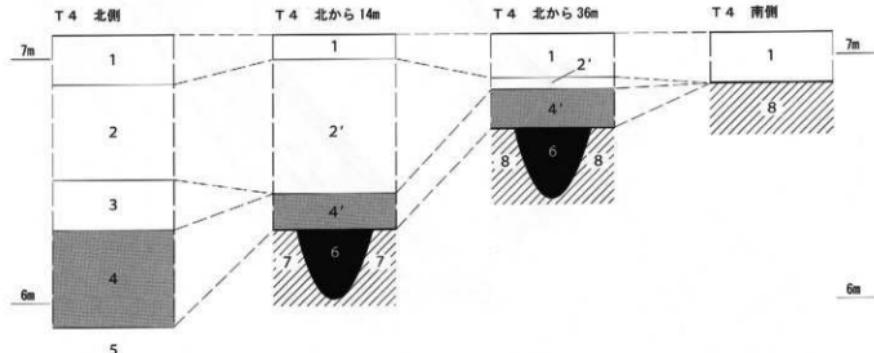
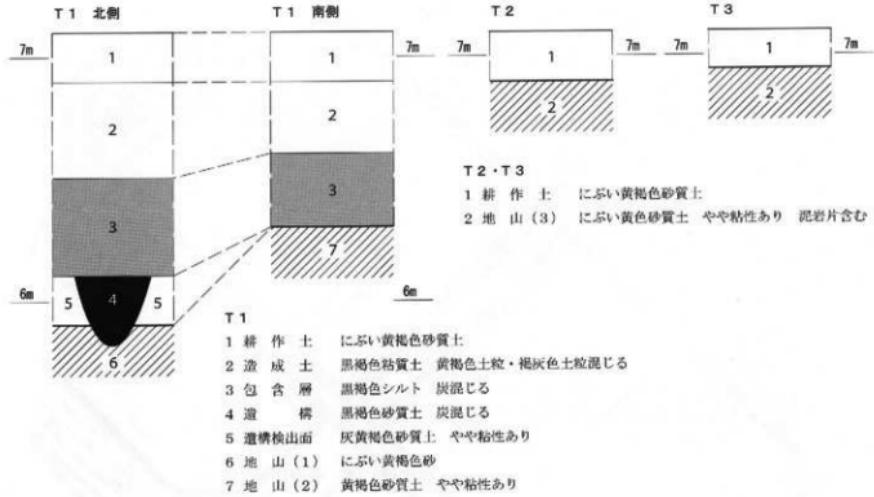
（2）調査の状況（第6・7・8図）

一次調査では、調査対象地に4基の試掘トレーナーを設定して調査を行った。調査の結果、T1で遺構・遺物を確認した。T1では北端で遺構を検出し、弥生土器を包含する黒褐色シルト層の堆積が確認された。検出された遺構は土坑・小穴である。ただ、一部に土地改良等によるものと考えられる擾乱が確認され、南側では遺構は検出されなかった。

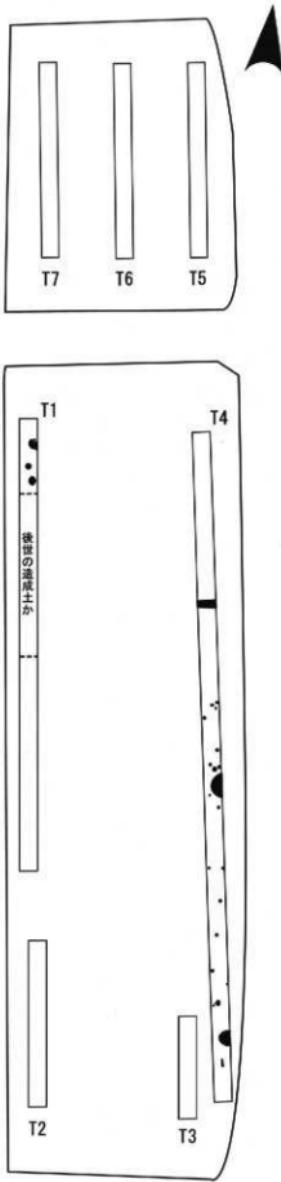
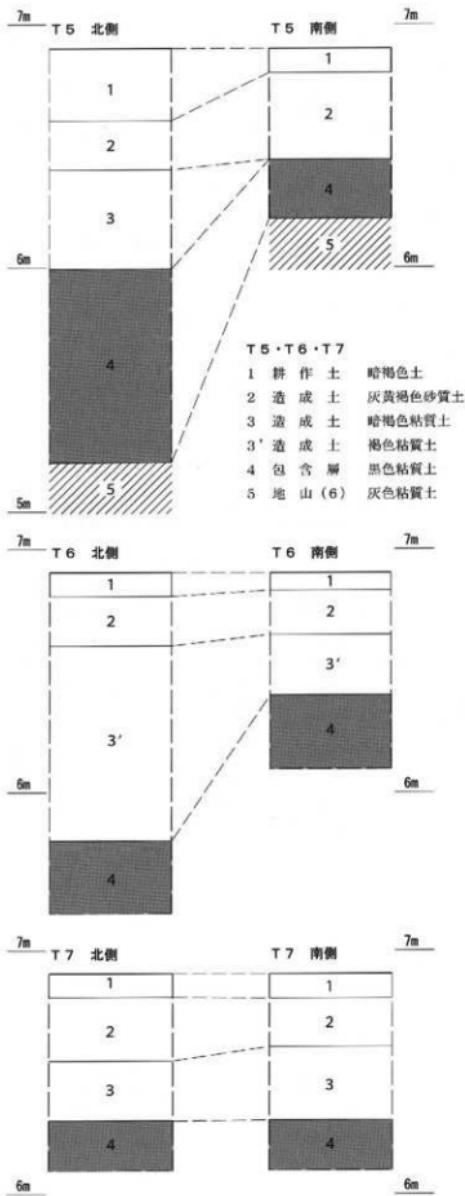
調査対象地南側に設定したT2・T3では、表土直下約10～20cmでぶい黄色砂質土～暗灰黄色砂質土の地山が確認された。丘陵裾部が削平されたものと考えられ、山砂状の地山には貝化石の混入もみられる。一次調査対象地の水田を造成する際に、南側からのびる丘陵裾部を削平したのであろう。特に調査区の南西側では遺構が確認されず、遺構・遺物包含層ともにすでに削平されたものと考えられる。なお、調査対象地の広い範囲で、地山に0.5～2m程度の砂岩ブロックが含まれているのが確認された。



第6図 鞍川E遺跡・鞍川D遺跡トレンチ位置図 ($S = 1/1,000$)



第7図 鞍川E遺跡土層柱状図(1) (S=1/20)



第8図 鞍川E道路土層柱状図(2) (S=1/20)
鞍川E道路試掘トレンチ平面図 (S=1/400)

調査区の北から南に継続するよう設定したT4では、広い範囲で土坑・小穴・溝等の遺構が検出された。また黒褐色シルト層から弥生土器がまとまって出土した。またT2・T3同様、T4の南側も削平を受けているものの、削り残された遺構が検出されている。

二次調査では、調査対象地に3基の試掘トレーニングを設定して調査を行った。調査の結果、少量の弥生土器・中世珠洲焼等を包含する黒色粘質土層が厚く堆積していることが確認された。遺構は確認できなかった。

試掘トレーニングの平面図と土層の柱状図を第7・8図に示した。地山の検出面は、丘陵裾部を削平した調査区南側で約10～20cmであるが、北側向かってゆるく傾斜している。遺構は、一次調査対象地の標高約6.1～6.9mの範囲で検出されるが、地山の標高が約5.2～6.2mとなる二次調査対象地では検出されない。人々、南から北に下っていく緩斜面上で営まれた遺跡で、さらに落ち込む二次調査対象地には遺跡が広がらないものと考えられる。

(3) 出土遺物（第9図）

調査では、一次調査対象地を中心に弥生土器154点・古代須恵器2点・中世珠洲焼4点・近世磁器1点・土錐1点等、あわせて174点が出土した。そのうち21点を図示した。

2～16は弥生土器である。これらは白江式として分類される弥生時代終末期のものと考えられる。

2～9・16が甕である。2は口径16.0cmを測る。口縁部はナデ調整、外面下部はミガキ調整を施す。頸部内外面は指で押さえる。3は口径15.0cmを測り、内外面ナデ調整を施す。4は口径13.4cmを測り、外面にナデ調整を施す。5は受け口状口縁を持つもので、口径19.2cmを測る。内外面にナデ調整を施す。6は有段口縁を持つもので、口径17.0cmを測る。内外面にナデ調整を施す。7も同じく有段口縁をもつもので、口径17.0cmを測る。外面は摩滅が著しい。内面は口縁部がナデ調整、下部がミガキ調整を施す。8は口径19.0cmを測り、外面にナデ調整を施す。9は頸部から胴上部の破片で、表面の摩滅が著しい。16は甕底部破片で、底径4.4cmを測る。内面にハケ調整が残り、外面は指で押さえる。

10は鉢である。口径12cmを測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施す。

11～15は高杯である。11は杯部で、口径21cmを測る。外面にナデ調整を施し、内面は摩滅して調整は不明である。12・14は脚部で、いずれも外面上部はナデ調整、外面下部はミガキ調整を施し、内面にはしばり痕が観察できる。14には円形の透かし穴が2か所残る。13も脚部で、外面はミガキ調整を施し、赤彩する。15は脚据部で、裾部径15cmを測る。外面にナデ調整を施す。

17は土錐である。残存長3.5cm、長径1.1cm、短径1.0cm、孔径0.4cmを測る。胎土に石英粒、海綿骨針を含む。弥生土器に混じり、黒褐色シルト層から出土した。

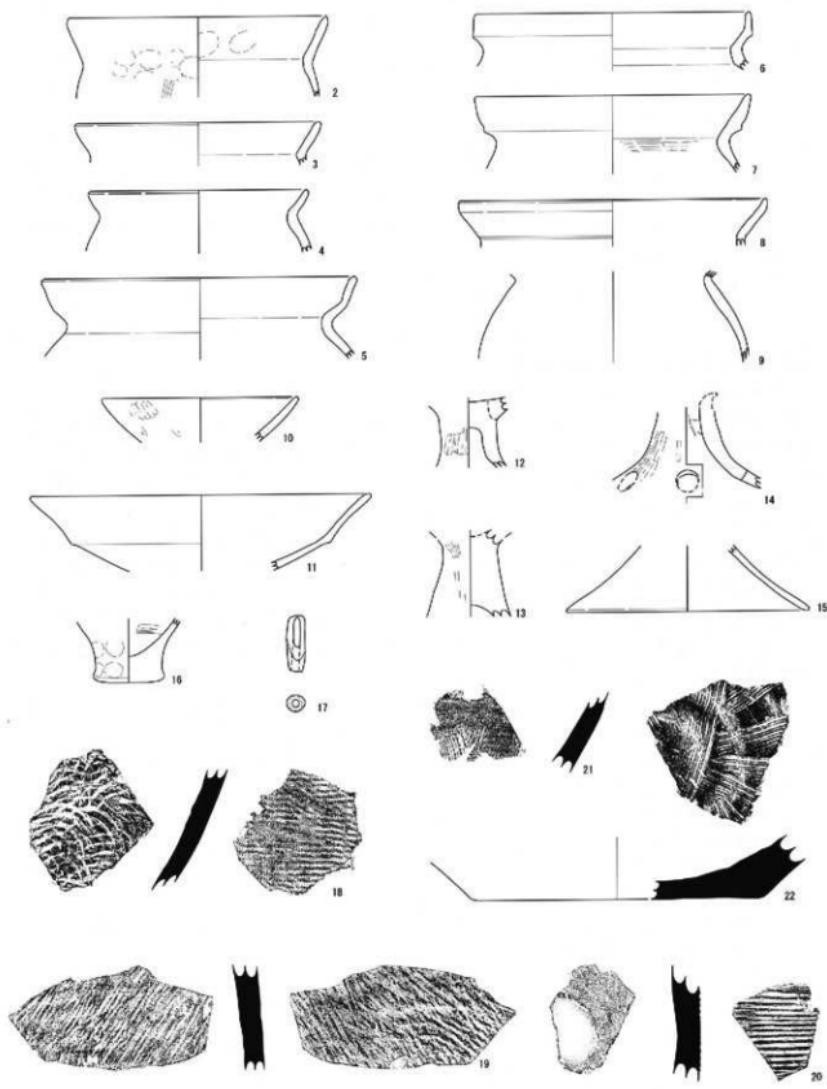
18は古代須恵器の甕体部破片である。外面に平行叩き痕、内面に同心円状當て具痕が残る。

19～22は中世珠洲焼である。19・20が甕体部破片である。19は外面に平行叩き痕が残り、内面はハケ状の器具で當て具痕をかき消してある。20は外面に平行叩き痕、内面に當て具痕が残る。21・22は擂鉢である。21はやや焼きが甘く灰黄色を呈する。22は底部破片で、底径17.4cmを測る。21・22いずれも鋭利で細密な搗歯原体による鉢目を施す。擂鉢2点は吉岡編年のⅡ～Ⅲ期におさまるものと考える。

(4) まとめ

試掘調査の結果、一次調査対象地の広い範囲で遺構・遺物が確認された。出土した遺物は弥生時代終末期の白江式に分類されるものを中心とし、遺構は土坑・小穴・溝等が検出された。二次調査対象地では遺構は検出されず、遺物の量もごく少量であった。丘陵裾部が削平されている調査対象地南側から北側にかけて緩斜面が下り、一次調査対象地の北側から二次調査対象地にかけて落ち込んでいるものと考えられる。

以上の試掘結果から、一次調査対象地1,153m²については本発掘調査が必要と判断した。なお、調査区南側は削平を受けるが、T4で確認されたように遺構が残存する可能性があったため、削平部も含めた全域を対象に含めた。二次調査対象地については、遺構がなく、遺物もごく少量であったため、本発掘調



第9図 鞍川E 進跡遺物実測図 ($S=1/3$)

査の対象からは除外した。

鞍川 E 遺跡の本発掘調査は、2期に分けて実施することになり、まず調査対象地南側約3分の2の範囲を一次調査の対象とした。一次調査は、平成23年10月28日から12月22日までの期間で実施した。調査対象面積は約837m²である。調査では、弥生時代終末期の土器がまとまって出土し、土坑・溝・小穴等が検出されたほか、13世紀後半頃までに埋没したと推測される溝跡が検出された。この溝跡からは古代の瓦塔破片が1点出土している。これら本発掘調査の詳細については、本書と同時に刊行される水見市埋蔵文化財調査報告第60冊『鞍川E遺跡I 市道鞍川巣峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告(1)』(水見市教育委員会2012)を参照していただきたい。また、残る北側3分の1についても、本発掘調査に着手したところである。こちらについては来年度の報告を予定している。

水見市内には、古墳時代前期の大型前方後方墳、柳田布尾山古墳(国指定史跡)をはじめ、70群約400基の古墳が確認されている。特に鞍川 E 遺跡の立地する上庄川の流域は古墳が集中して築かれた地域でもある。今回実施した鞍川 E 遺跡試掘調査と本発掘調査の成果は、水見地域の古墳時代直前の様相を知る手がかりとなるものと考えている。

第4節 鞍川D遺跡試掘調査の成果

(1) 調査対象地(第5・6図)

鞍川D遺跡は、平成6年度の水見市教育委員会の分布調査で発見された遺跡である。分布調査では、須恵器2破片、珠洲焼2破片、瀬戸1破片、越中瀬戸1破片、近世陶器1破片などが採集されており、古代・中世主体の遺跡と推定された。これまで、一般国道415号(鞍川バイパス)整備に先立つ試掘調査・本発掘調査と、金沢医科大学水見市民病院建設に先立つ試掘調査を実施している。

一般国道415号(鞍川バイパス)整備に先立つ調査は、平成13年度に試掘調査、平成15年度に本発掘調査を実施した。調査では、井戸跡、流路、溝、土坑などの遺構が検出された。遺物としては珠洲焼や土師器皿、青磁、白磁、山茶碗など13世紀前半を中心に、12世紀後半から13世紀代いっぱいの遺物が出土している。建物跡等は見つかっていないが、いずれも13世紀前半の構築と考えられる井戸跡が3基検出された。調査区の外側に向けて平安時代末から鎌倉時代始め頃に営まれた集落が広がっていると推測される。

検出された3基の井戸跡のうち、1基では丸木舟を転用した井戸側が用いられていた。井戸側に転用された丸木舟は、平安時代の終わり頃(12世紀代)に建造されたもので、舟底に見られるフナクイムシなどによる食害痕から海を主な活動場としていたと考えられる。補修を受けつつ使用されたこの丸木舟は、最終的には13世紀前半に井戸側に転用された。用材にはスギが使われており、推測される全長は約10mと、単材の丸木舟としてはかなり大型の部類に入る。この井戸側を丸木舟と判断した根拠が各部に施された加工である。船梁を通したと推測される方形の穴、舷側上部の切り欠き、埋木、早緒や檣綱を縛った穴、割れを補修したカスガイなど、断片的であるが当時の丸木舟の構造を伝えてくれる資料である。

平成21年度には、水見市民病院建設事業に先立つ試掘調査を実施した。調査では、対象地の広い範囲で遺構・遺物を確認した。検出した遺構は溝・土坑・ピット等である。出土遺物は、中世珠洲焼・中世土師器等、12世紀後半から13世紀前半が中心となる。ただし、遺構の多くは、昭和30年代に実施された土地改良により上部が削平されているものと考えられ、遺存状態は良くない。

以上、鞍川D遺跡は、12世紀後半から13世紀代を主体とする遺跡である。遺構の分布状況からすると、遺跡の東側からその周辺にかけて集落が広がっているものと考えられる。

今回の試掘調査の対象地は鞍川D遺跡東側で、現況は水田(休耕田)である。標高は約5mを測る。

(2) 調査の状況(第6図)

調査対象地に5基の試掘トレチを設定して調査を行った。調査の結果、過去の土地改良によるとみられる整地土層を確認した。また、整地土層の下に旧表土面とみられる黒褐色シルト～黒褐色砂質土層

を確認した。この層は平成15年度に近接地で実施した本発掘調査で遺物包含層とした層に類似するが、遺物の包含は確認できなかった。遺物は、耕作土中から弥生土器・中世珠洲焼等が少量出土した。遺構は確認できなかった。

基本層序を第3表に示した。

第3表 鞍川D遺跡 基本層序

I層	耕作土	10~30cm	黒褐色砂質土
II層	整地土	0~40cm	灰黄褐色砂質土
III層	整地土	25~40cm	にぶい黄褐色粘質土
IV層	整地土	10~45cm	褐灰色粘質土・褐灰色砂質土
V層		0~10cm	黒褐色シルト
VI層		0~30cm	黒褐色砂質土
VII層	地山		灰黄褐色砂

(3) 出土遺物（第10図）

調査では、弥生土器・中世珠洲焼・中世青磁・時期不明土器片・鉄滓等、6点が出土した。そのうち2点を図示した。23は、弥生土器甕の底部である。底径3.2cmを測り、外面にやや粗いハケ調整を施す。24は、中世珠洲焼の甕体部破片である。外面に平行叩き痕が残る。

(4)まとめ

調査対象地は、昭和30年代に実施された土地改良の影響を強く受けしており、遺構は確認できなかった。また、遺物の量も少なく、本発掘調査は不要と判断した。平成13年度に実施した一般国道415号（鞍川バイパス）の建設時に先立つ試掘調査でも、調査対象地の東側は土地改良の影響を強く受けているのを確認したが、今回の調査においても同様の結果となった。鞍川D遺跡は、今回の調査区の西側および北西側に広がり、調査区周辺は土地改良による擾乱を受けているものと推測される。

遺物は、以前より確認されていた中世のほか、細片ではあるが弥生時代のものと見られる土器片が出土した。本遺跡の北西に弥生時代中期の鞍川中B遺跡、南東に弥生時代終末期の鞍川E遺跡が所在するため、本遺跡周辺にも弥生土器が散布するのであろう。

なお、今回の鞍川D遺跡試掘調査対象地の東側で鞍川E遺跡の北側に位置する有磯高校農場については、これまで分布調査が実施できていないため、今年度の試掘調査の結果に基づいて今後の対応を検討する予定であった。今年度の鞍川E遺跡・鞍川D遺跡の試掘調査と平成13年度の鞍川D遺跡試掘調査の結果から、有磯高校の農場付近は昭和30年代に実施された土地改良の影響を強く受けているものと考えられ、遺跡の広がりはないものと推測される。



第10図 鞍川D遺跡遺物実測図 (S=1/2)

第4章 都市計画道路水見伏木線整備事業に先立つ柳田南遺跡試掘調査

第1節 遺跡の環境

(1) 地理的環境（第11図）

調査対象の柳田地区は、水見市南東部に立地する。東は富山湾に臨み、西は丘陵が連なる。地区内を国道160号と国道415号が横断する。海岸付近は砂浜と畑地が広がり、西方の丘陵付近には水田地帯がある。

柳田および北側の窪、南側の島尾、高岡市太田にかけてに至る海沿いの砂浜・畑地は、かつて布勢水海と呼ばれた潟湖（現在の十二町潟）を海から隔てる砂州が発達してできた砂丘地帯である。また、西側の丘陵部と砂丘地帯との間は、平安時代以前は布勢水海の一部だったとされる。また砂丘地帯は、かつては起伏のある砂丘列が幾重にも連なり、中にはクロマツの林が広がっていた、という。こうした松林は近世、元禄年間（1688～1704）以降に少しづつ開墾され、田畠に変えられていったとされ、現在は広大な平地が広がる。近世に開墾されて以降、主に畑地として利用されてきた砂丘部であるが、近年は宅地化が進んでいる（水見市1999・2000・2006）。

柳田南遺跡は、平成5年度に水見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。分布調査では、弥生時代もしくは古墳時代の土器、古代須恵器、越中瀬戸焼、近世陶磁器等が採集された。遺跡は標高約5mに立地し、都市計画道路水見伏木線整備事業による用地買収以前は宅地・畑地として利用されていた。

(2) 歴史的環境

窪から柳田、島尾にかけての砂丘地帯では、広範囲で遺物の散布が確認でき、窪北遺跡・松田江北遺跡・窪シムラ遺跡・柳田遺跡・柳田南遺跡・島尾遺跡・島尾北遺跡が所在する。ほとんどの遺跡では縄文～近世にかけての遺物の散布がみられるものの、明確な遺構の検出例はない。一方、発掘調査によって、多くの遺物が出土した例として柳田遺跡があげられる。柳田遺跡では、昭和32年に水見高校歴史クラブの手によって小規模ではあるが発掘調査が実施されている。地表より基盤の層まで85～105cmで、最下部に良好な包含層が確認された。縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代の遺物があり、なかでも弥生時代後期前半の資料がまとめて出土している。

柳田地区西側の丘陵には、日本海側最大の前方後方墳・柳田布尾山古墳（国指定史跡）が所在する。柳田布尾山古墳は、全長107.5mを測り、古墳時代前期前半の築造と考えられている。その他、周辺の主な遺跡には、古墳時代後期の須恵器窯跡である窪カンデ窯跡、一字一石経が出土したと伝えられる窪経塚がある。

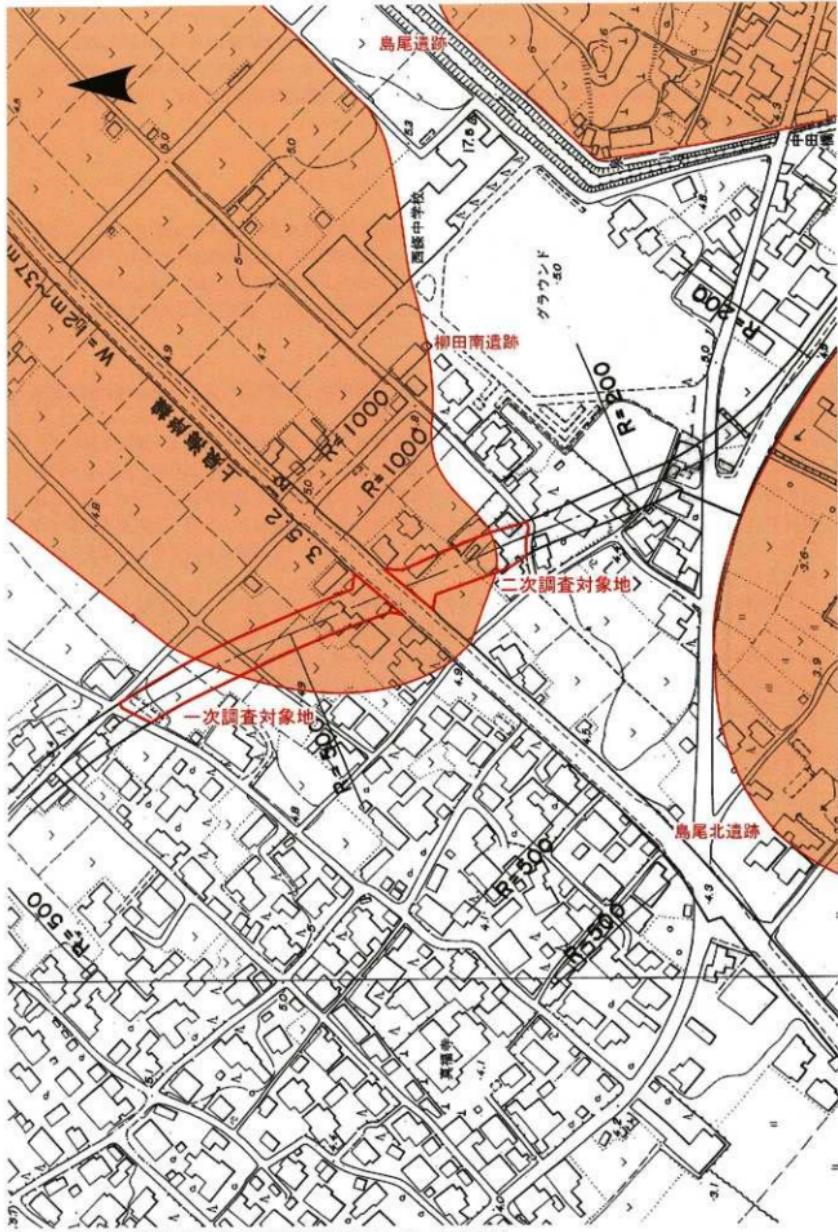
第2節 調査に至る経緯と経過

都市計画道路水見伏木線は、市の南部地区（窪・柳田）を南北に継続する市街地中心部への幹線道路であり、国道415号のバイパス路線として高岡市へのアクセス機能を有する重要道路である。また、当地区においては住宅化の進行が著しいにもかかわらず、地域内道路が狭隘なため、交通渋滞や住居環境の劣化が著しい。このため、当路線を整備することによって地区内に発生する交通渋滞の緩和と住居環境の整備、地域の活性化を図ることを目的に計画された。

事業計画地の北側には柳田遺跡、南側には柳田南遺跡が立地しており、用地買収後の試掘調査が必要となった。なお、事業計画地南側より順次進められている用地買収によって取得された用地には、路線を区画するための側溝工事が施工された。施工は、柳田南遺跡の範囲内の一部を対象とし、平成21年度と平成22年度に実施された。この施工については、当路線の試掘調査事業に先行するものであることと、側溝工事の範囲自体は狭小ものであったため、工事会社で対応した。

平成23年度までは、柳田南遺跡の範囲内の用地買収が完了することになったため、平成23年度事業として柳田南遺跡の試掘調査を実施した。なお、当初の予定では、用地買収の逆次第で柳田遺跡の試掘調査を実施する計画であったが、用地買収未完了のため、次年度以降に持ち越しとなった。

試掘調査は、まず上泉海岸線の北西側地区について平成23年7月25日および26日までの2日間で実



第 11 図 都市計画道路水見伏木線事業予定地周辺の遺跡 ($S = 1/2,500$)

施した。その後、建設課と協議し、鞍川地区の二次調査を11月に実施するのに合わせて、上泉海岸線の南東側地区についても調査の対象とすることとした。南東側地区の試掘調査は11月11日に実施した。試掘調査では、機械力によって試掘トレンチ12基（一次5基、二次7基）掘削して実施した。調査対象地の面積は、計1,988.46m²（一次1,488.46m²、二次500m²）で、発掘面積は計161.9m²（一次117.1m²、二次44.8m²）である。

第3節 試掘調査の成果

(1) 調査対象地（第11・12図）

柳田南遺跡は、平成5年度に水見市教育委員会が実施した分布調査で発見された遺跡である。分布調査では、弥生時代もしくは古墳時代の土器、古代須恵器、越中瀬戸焼、近世陶磁器等が採集された。

今回の試掘調査対象地は、遺跡の南西端部に位置し、中央を上泉海岸線が横切る。都市計画道路水見伏木線整備事業による用地買収以前は宅地・畠地として利用されており、調査区の標高は約5mを測る。

(2) 調査の状況（第12図）

一次調査の対象となった上泉海岸線の北西側に5基、二次調査の対象となった上泉海岸線の南東側に7基、計12基の試掘トレンチを設定し、調査を実施した。

一次調査の対象地では、いずれのトレンチも旧耕作土の直下ににぶい黄褐色砂質土～黒褐色砂質土～明黄褐色砂と堆積する。表土から160cmの深さまで深掘りを行ったが、明褐色砂の純砂層が続いており、この層が一応の地山と判断した。明褐色砂層の上面に起伏があるためか、黒褐色砂質土が落ち込み、遺構状に見える箇所もあったが、浅く平面プランがはっきりしないものがほとんどで、人為的な遺構ではないと考えられる。遺物は近世陶磁器が少量出土したほか、1点ずつではあるが古代の須恵器と土師器が出土した。

二次調査の対象地では、いずれのトレンチも表土（整地土）30～60cmほどの下に明黄褐色の純砂層が厚いところで1m近く堆積する。その下に、黒褐色砂質土層があり、その直下に橙色砂層が検出される。この橙色砂層が地山であると考えられる。遺構は検出されず、また遺物も出土しなかった。

一次調査対象地（上泉海岸線北西側）、二次調査対象地（上泉海岸線南東側）それぞれの基本層序を、第4・5表に示した。

第4表 柳田南遺跡 一次調査対象地（上泉海岸線北西側）基本層序

I層	整地土	0～30cm	にぶい黄褐色砂質土
II層	旧耕作土	20～30cm	灰黄褐色砂質土～黒褐色砂質土
III層		25～30cm	にぶい黄褐色砂質土
IV層		25～40cm	黒褐色砂質土（古代土師器出土）
V層	地山		明黄褐色砂

第5表 柳田南遺跡 二次調査対象地（上泉海岸線南東側）基本層序

I層	整地土	30～60cm	灰黄褐色砂質土
II層		60～100cm	明黄褐色砂
III層		0～50cm	黒褐色砂質土
IV層	地山		橙色砂

(3) 出土遺物（第13図）

一次調査の対象地で、古代須恵器・古代土師器・近世陶磁器等、9点が出土した。そのうち1点を図示した。

25は古代須恵器の壺体部破片である。外面に平行叩き痕とカキメ、内面に同心円状當て具痕が残る。外面には自然釉がかかる。

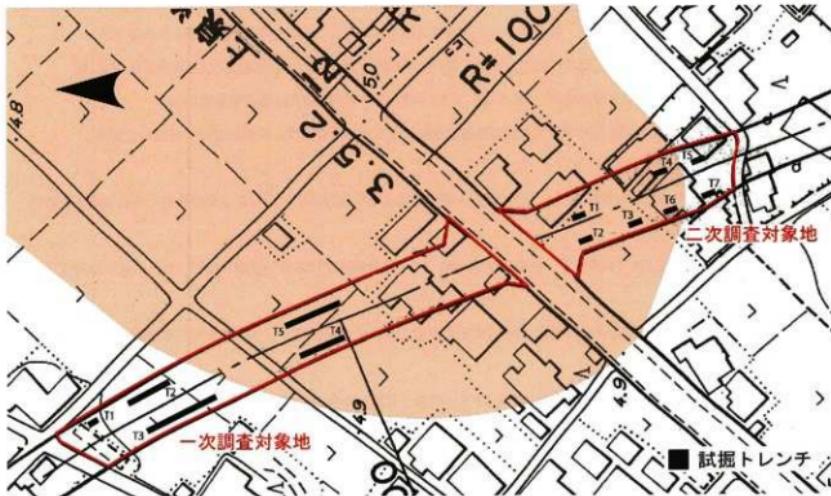
(4) まとめ

柳田南遺跡では、これまでアパート建設や個人住宅の建設に伴う試掘調査を実施してきたが、砂層が厚く堆積しており、明確な構造は検出されていない。また、遺物は古代から近世にかけての小片が確認されるのみであった。今回実施した氷見伏木線整備に先立つ試掘調査においてもほぼ同様の結果となり、本発掘調査は不要と判断した。

柳田南遺跡のみではなく、松田江北遺跡など窪・柳田両地区の砂丘地帯に分布するその他の遺跡も、同じく砂層が厚く堆積する。本章第1節で触れたように、元禄年間（1688～1704）以降に開墾される前のこの地域は、起伏のある砂丘列が幾重にも連なり、中にはクロマツの林が広がっていた、とされる。元禄年間以前に何らかの土地利用があったとしても、開墾によってすでに削平されてしまっている可能性もある。

また、砂丘地帯の北端に位置する伊勢大町地内の伊勢玉神社中世墓群では、地表下約1mに埋まつた五輪塔が出土している（氷見市2002）。このように砂丘地帯では、風などによる砂丘砂の移動によって埋没した遺跡も存在すると推測される。砂によって遺跡が埋没し、また近世以降に開墾された際に旧地形が大きく改変されたことが、窪・柳田両地区的砂丘地帯の広い範囲に遺物が散布している遠因かもしれない。

来年度には、同じ氷見伏木線計画地内に所在する柳田遺跡の試掘調査を予定している。柳田遺跡も砂丘地帯に立地する遺跡ではあるが、昭和32年に実施された氷見高校歴史クラブによる発掘調査ではまとまった量の遺物が出土している。調査対象地は、昭和32年の調査区からは離れた位置ではあるが、昭和32年以来の本格的な調査であり、その調査成果に期待したい。



第12図 柳田南遺跡トレンチ位置図 ($S=1/1,500$)



第13図 柳田南遺跡遺物実測図 ($S=1/2$)

引用・参考文献

茨木武義 1976『猪田百年誌』

久々忠義 1999「古墳出現期の土器について」『富山考古学会創立50周年記念シンポジウム 富山平野の出現期古墳 《發表要旨・資料集》』富山考古学会

座村誌研審委員会 1959『座村のあゆみ』

熊無村史刊行委員会 1997『熊無村史』

田中幸生・中谷正和 2003「越中における古墳出現前後の地域別土器編年—壺形土器を中心に—」『富山大学考古学研究論集 暫気樓—秋山進午先生古稀記念—』秋山進午先生古稀記念論集刊行会

氷見市 1963『氷見市史』

氷見市 1999『氷見市史』9 資料編7 自然環境

氷見市 2000『氷見市史』6 資料編4 民俗・神社・寺院

氷見市 2002『氷見市史』7 資料編5 考古

氷見市 2006『氷見市史』1 通史編1 古代・中世・近世

氷見市教育委員会 2001『新保南遺跡 中山間地域総合整備事業に伴う試掘調査概要』氷見市埋蔵文化財調査報告第34冊

氷見市教育委員会 2002『平成八~十二年度 氷見市神社調査報告書』

氷見市教育委員会 2005『鞍川中A遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅰ』氷見市埋蔵文化財調査報告第41冊

氷見市教育委員会 2006『鞍川D遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告第44冊

氷見市教育委員会 2006『鞍川中B遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅲ』氷見市埋蔵文化財調査報告第45冊

氷見市教育委員会 2008『氷見市遺跡地図【第3版】【改訂版】』氷見市埋蔵文化財調査報告第51冊

氷見市教育委員会 2010『金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う試掘調査概要 鞍川D遺跡 鞍川中B遺跡』

氷見市埋蔵文化財調査報告第55冊

氷見市教育委員会 2010『鞍川中B遺跡Ⅱ 金沢医科大学氷見市民病院建設事業に伴う発掘調査報告』氷見市埋蔵文化財調査報告第57冊

氷見市教育委員会 2012『鞍川E遺跡Ⅰ 市道鞍川豊峰線バイパス整備事業に伴う発掘調査報告(1)』氷見市埋蔵文化財調査報告第60冊

氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1994『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ 1993年度』氷見市埋蔵文化財調査報告第16冊

氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ 1994年度』氷見市埋蔵文化財調査報告第17冊

氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室 1997『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ 1996年度』氷見市埋蔵文化財調査報告第23冊

氷見市立博物館 2006『特別展 竹里山の謎にせまる—山城・寺院・鞍川氏—』

氷見市立博物館 2007『特別展 地震・地すべり・火事・洪水—災害にまなぶ氷見—』

氷見市立博物館 2011『特別展 卑弥呼の時代の氷見—古墳出現前夜—』

安 英樹 2003『漆町編年・その光と影と』『富山大学考古学研究室論集 暫気樓—秋山進午先生古稀記念—』

秋山進午先生古稀記念論集刊行会

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



1

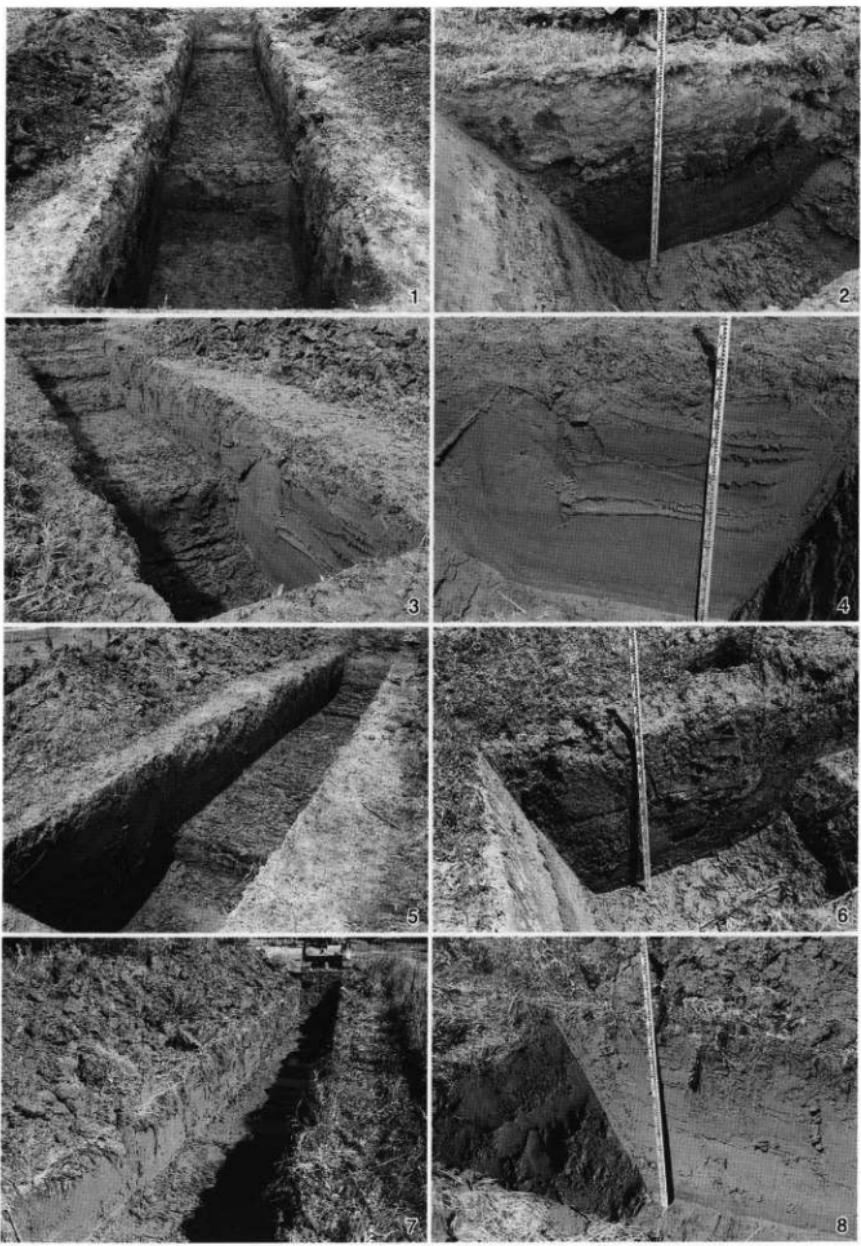


2

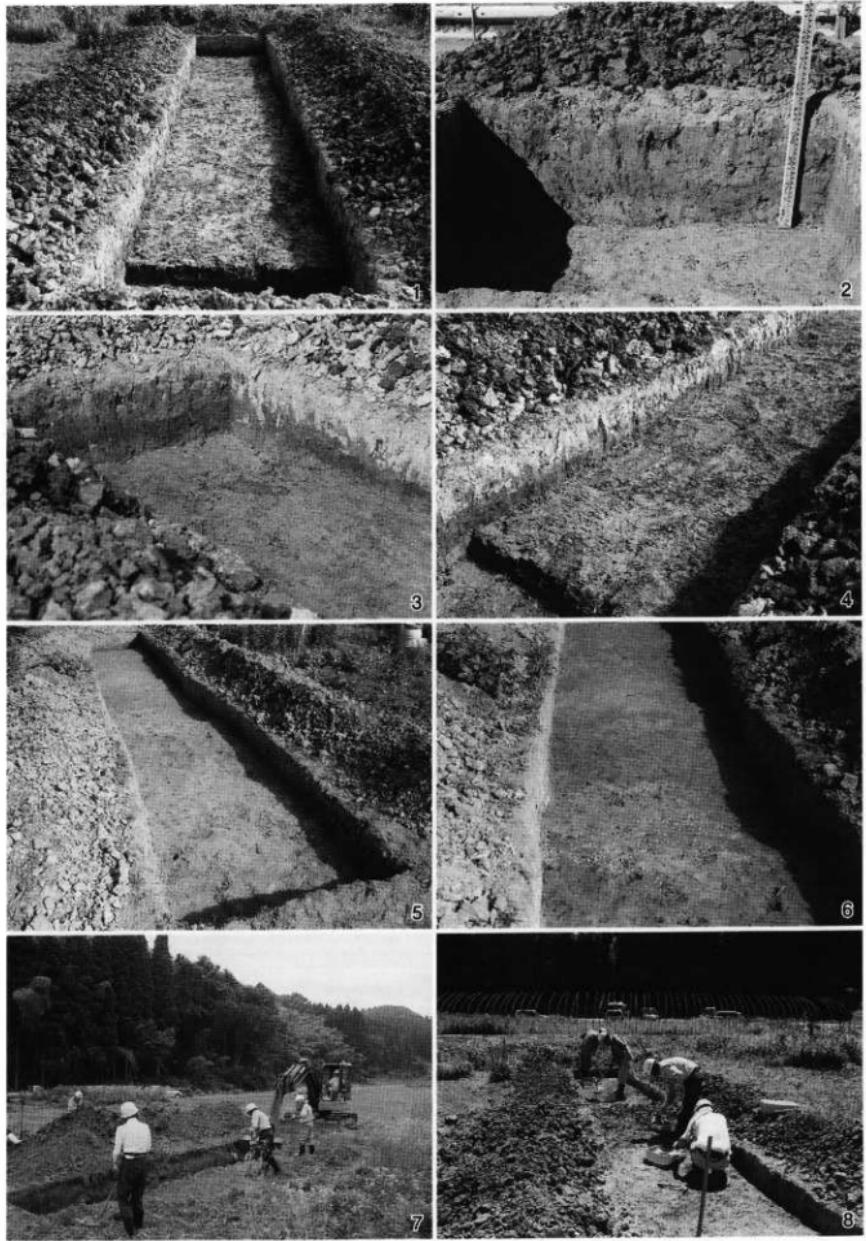
図版 1 谷屋上ノ江遺跡

1. 調査区遠景（北西から）平成 23 年 9 月撮影

2. 調査区遠景（南東から）平成 23 年 9 月撮影



图版2 谷屋上ノ江道路
 1. T2 完掘状况 2. T7 土層断面 3. T13 完掘状况 4. T8 土層断面
 5. T2 完掘状况 6. T8 土層断面
 7. T13 完掘状况 8. T13 土層断面



図版3 谷屋上ノ江遺跡
1. T9 完掘状況
2. T9 土層断面
7・8. 作業風景

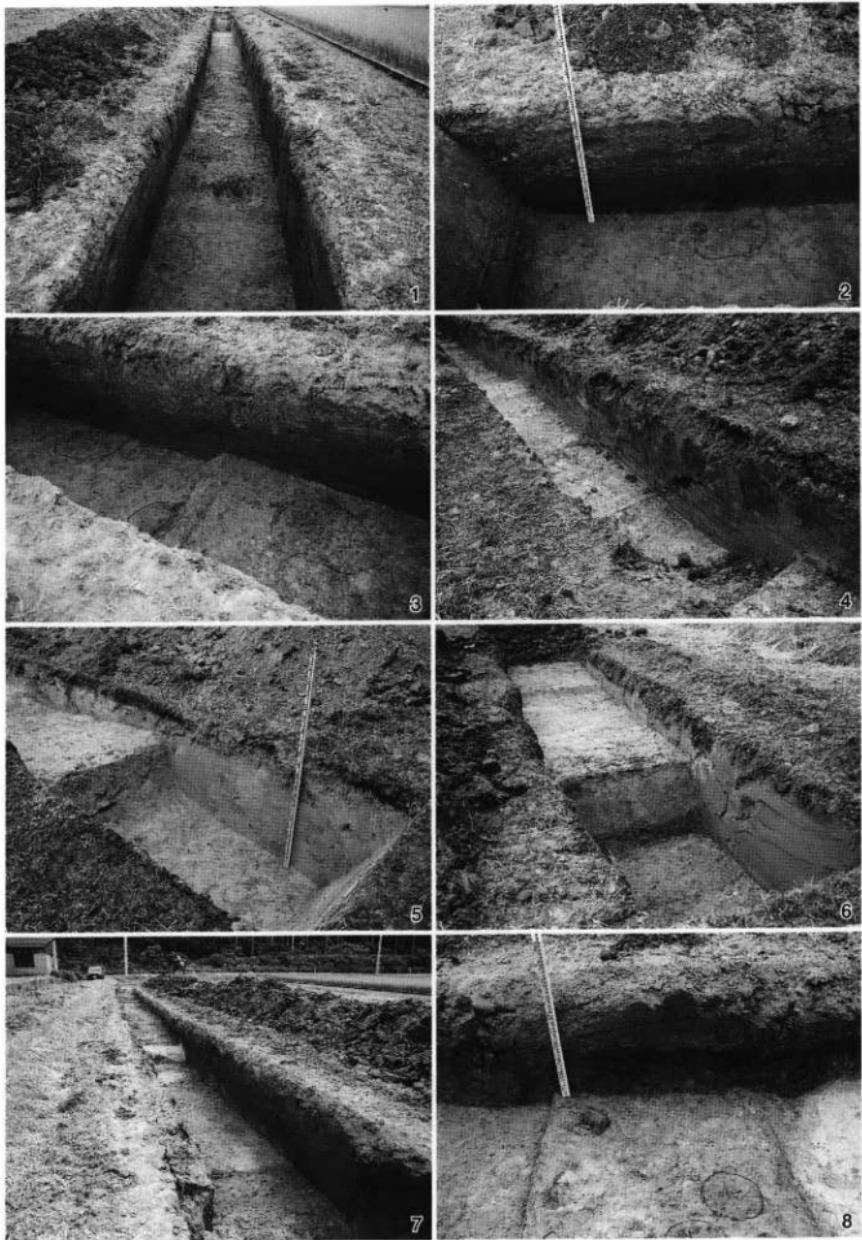
2. T9 土層断面 3・4. T9 遺構検出状況 5. T10 完掘状況 6. T10 撥乱検出状況



図版4

鞍川E道路・鞍川D跡跡

1. 鞍川靈峰線バイパス事業予定地遠景（西から） 平成21年5月撮影
2. 鞍川靈峰線バイパス事業予定地遠景（北から） 平成21年5月撮影



図版 5 鞍川 E 遺跡（一次調査）

1. T1 完掘状況 2. T1 土層断面 3. T1 遺構検出状況 4. T1 南端 5. T2 土層断面 6. T3 土層断面
7. T4 完掘状況 8. T4 土層断面



1



2



3



4



5



6



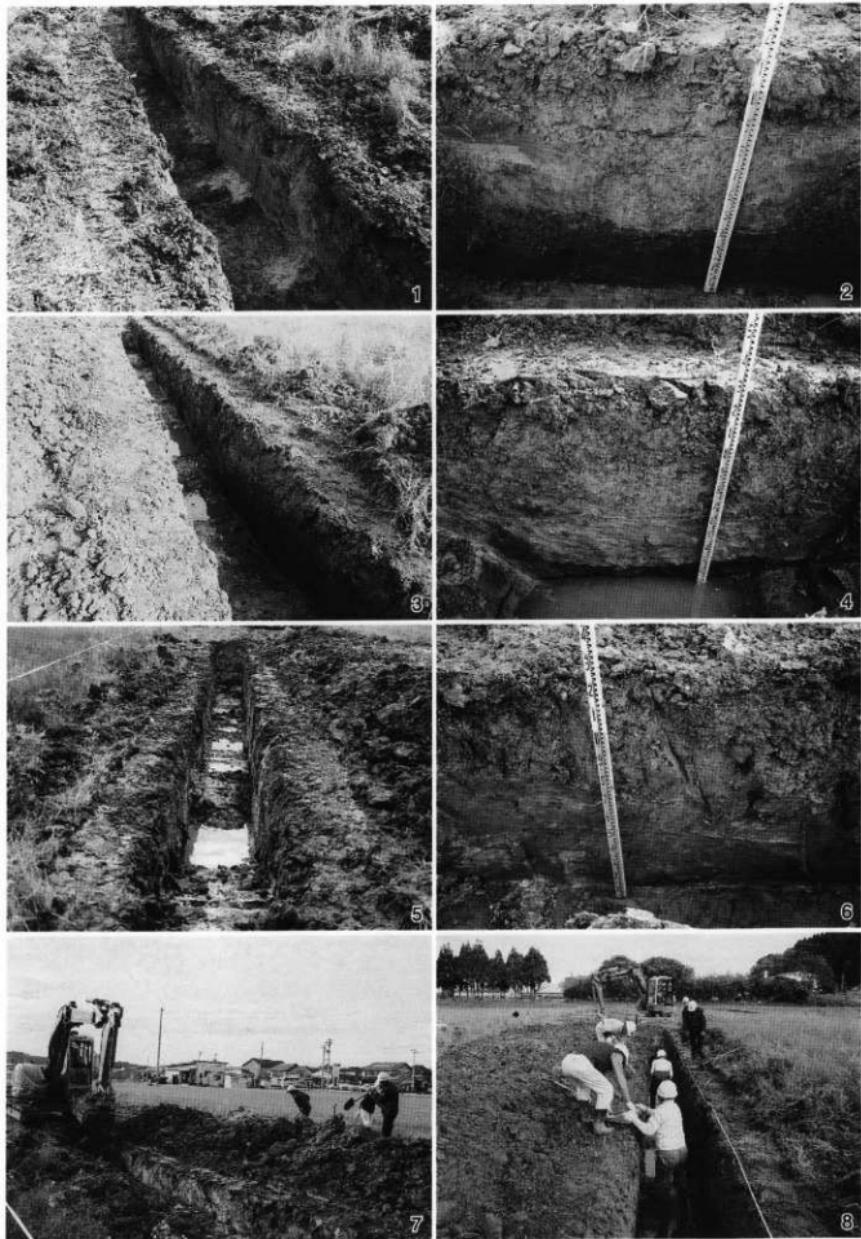
7



8

図版 6 稲川E遺跡（一次調査・二次調査）

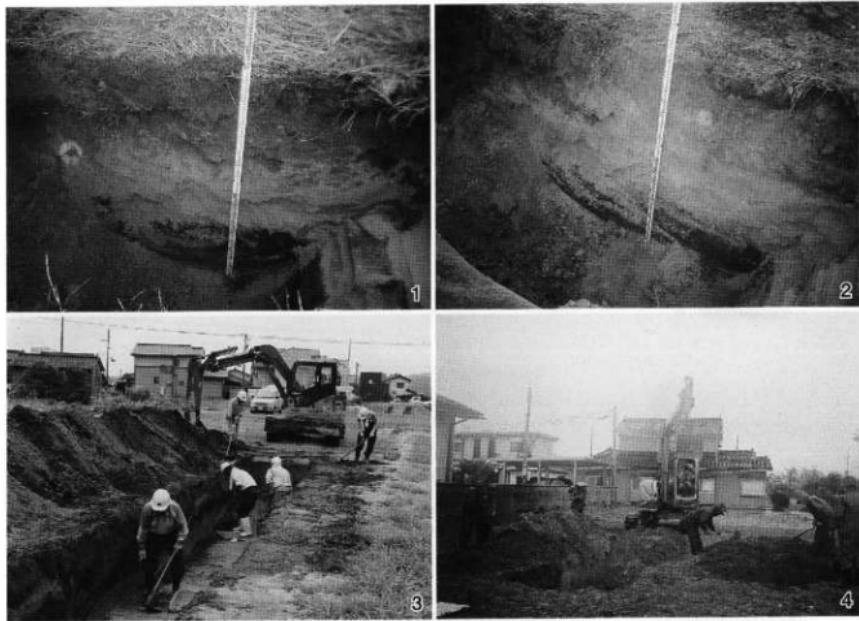
1・2. T4 造構検出状況 3. T5 完掘状況 4. T5 土層断面
7. 作業風景（一次調査） 8. 作業風景（二次調査）



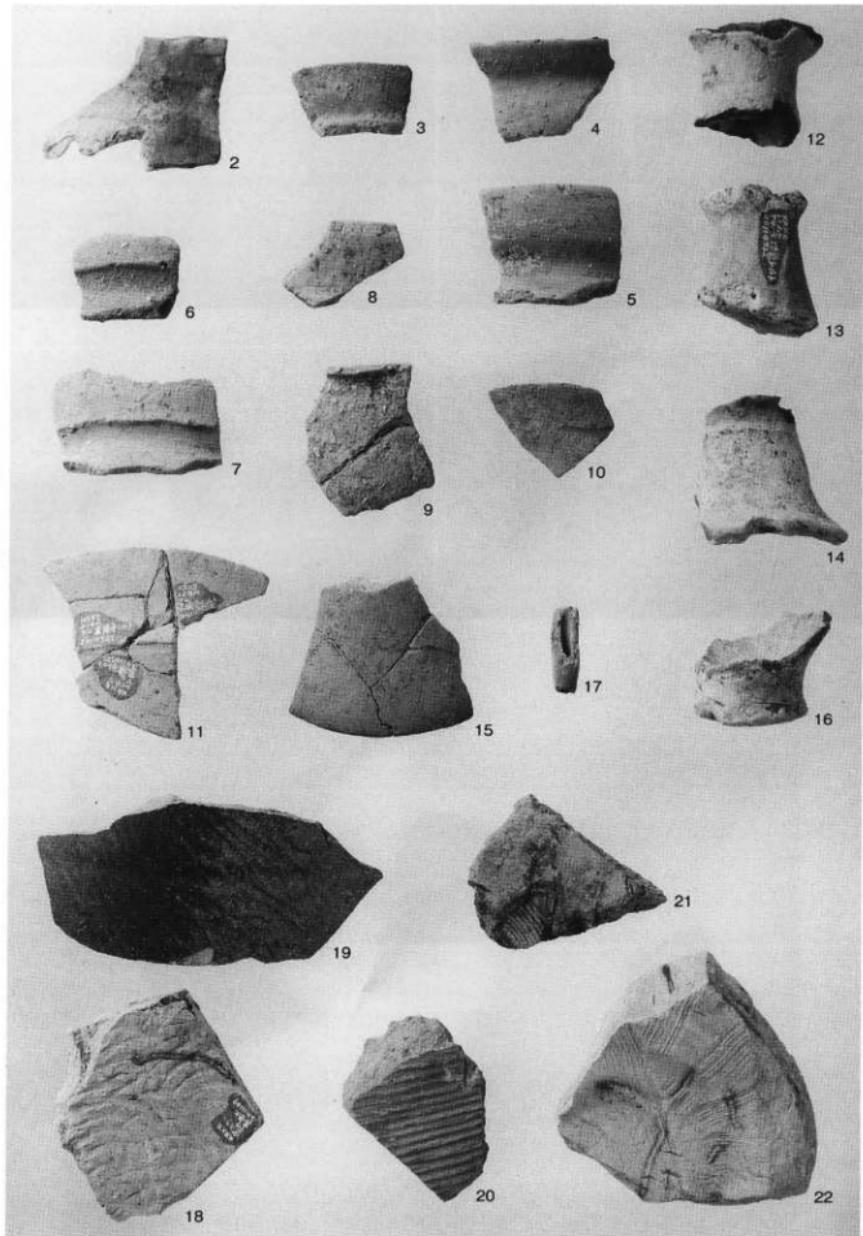
図版 7 駒川D遺跡
 1. T3 完掘状況 2. T3 土層断面 3. T4 完掘状況 4. T4 土層断面
 5. T5 完掘状況 6. T5 土層断面
 7・8. 作業風景



図版 8 梶田南遺跡（一次調査）
 1. T2 完掘状況 2. T2 土層断面 3. T3 完掘状況 4. T3 土層断面 5. T4 完掘状況
 6. T4 土層断面 7. T5 完掘状況（黒褐色砂質土の落ち込み検出）8. T5 土層断面



図版 9 柳田南道路（二次調査ほか）・遺物写真（1）
 1. T3 土層断面 2. T5 土層断面 3. 作業風景（一次調査） 4. 作業風景（二次調査）
 谷屋上ノ江道路・鞍川II D道跡・柳田南道路出土遺物



図版 10 遺物写真 (2) 鞍川 E 遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひみしないいせきはくつちょうさがいほうに
書名	水見市内遺跡発掘調査概報Ⅱ
圖書名	谷屋上ノ江遺跡 輪川E遺跡 輪川D遺跡 柳田南遺跡
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第59冊
編著者名	廣瀬直樹
編集機関	水見市教育委員会
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL 0766(74)8215
発行年月日	2012年3月16日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
谷屋上ノ江遺跡	水見市谷屋	16205	389	36° 52' 00"	136° 55' 00"	20110719 ~ 20110726	239.7m ²	試掘・確認調査
輪川E遺跡	水見市輪川	16205	394	36° 51' 19"	136° 58' 12"	20110721 ~ 20110722 20111109	217.6m ²	試掘・確認調査
輪川D遺跡	水見市輪川	16205	250	36° 51' 21"	136° 58' 08"	20111109 ~ 20111110	53.9m ²	試掘・確認調査
柳田南遺跡	水見市柳田	16205	239	36° 49' 45"	137° 00' 11"	20110725 ~ 20110726 20111111	161.9m ²	試掘・確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷屋上ノ江遺跡	散布地	古墳後期 古代	小穴	古墳須恵器 古代須恵器	
輪川E遺跡	散布地	弥生終 古代 中期	土坑 小穴 溝	弥生土器 古代須恵器 中世珠洲焼	土坑・小穴・溝等を検出。 弥生時代終末期の土器が出土。
輪川D遺跡	集落	弥生中 世	なし	弥生土器 中世珠洲焼	
柳田南遺跡	散布地	古近世	なし	古代須恵器 近世陶磁器	

要約	一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路改築事業に先立つ谷屋上ノ江遺跡の試掘調査では、調査対象地の大部分が論田川の土砂流入の影響を受け遺構・遺物ともに確認できなかった。調査対象地ほぼ中央に位置する微高地では、小穴と古墳時代後期の須恵器等、遺構・遺物を確認した。微高地は一部擾乱を受け、遺構・遺物ともに少量であったため、本発掘調査は不要と判断した。
	市道輪川靈峰線バイパス整備事業に先立つ輪川E遺跡・輪川D遺跡の試掘調査では、輪川E遺跡において土坑・小穴・溝等を検出し、弥生時代終末期の土器がまとまって出土した。輪川D遺跡では少量の弥生土器・中世珠洲焼等が出土したが、調査区は昭和30年代の土地改良の影響を受け、遺構は確認できなかった。輪川E遺跡については、南側1153m ² の本発掘調査が必要と判断した。輪川D遺跡については本発掘調査不要と判断した。

都市計画道路水見伏木線整備事業に先立つ柳田南遺跡の試掘調査では、厚く堆積する砂層を確認したが、明確な遺構は確認できなかった。また、遺物は古代から近世にかけての小片が確認されるのみであった。そのため、本発掘調査は不要と判断した。

平成 24 年 3 月 14 日印刷

平成 24 年 3 月 16 日発行

水見市埋蔵文化財調査報告第 59 冊

水見市内遺跡発掘調査概報Ⅱ

谷屋上ノ江遺跡 鞍川 E 遺跡 鞍川 D 遺跡 柳田南遺跡

編集・発行 水見市教育委員会

〒 935-0016

富山県水見市木町 4 番 9 号

☎ 0766(74)8215

印 刷 菊華堂印刷株式会社